

学生たちの観た日本

大学名： 清華大学

氏 名： 王宝源

テーマ： 4.日中間の交流

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

とある際の団長のお話の中で言及された通り、日本は中国の永遠の隣人であり、歴史的に見れば、中日間には多くの文化的交流や貿易の往来の他、幾度かの忌むべき戦争や摩擦があった。

戦争とは、両者にとってメリットとなるものでは永遠に無く、往々にして大きな損失をもたらすものである。中日間の歴史がその点を証明しており、これからの中日間は平和的な交流が必要である。現在、日本と中国はいずれも世界における強国であり、大国間の駆け引きにおいて、「タカ派」は往々にして共倒れを招くものであり、まして中日両国の文化は本来、その源を同じくするものである。

中国のますます大きくなる市場規模や市場需要において、日本商品は頻繁に見かけることができ、その優れた品質で名高い。日本経済の中国への依存度は次第に高まり、多くの日本企業がますます中国市場への関わりを重視していることは、中国にとって新たな血液を注入することであり、それは新たな試練ももたらしている。中国企業の競争力は次第に強化され、日本企業とシェアを競い合うことになるが、これこそ中日間のあるべき局面であり、企業間の競争があつてこそ双方が互いに進歩し、競争の中で己の欠点を見つけ、絶えず革新や発展をしていくことができるのである。また当然ながら中日双方の企業や政府も競争の中で提携を模索し、共に経済や文化の発展を牽引し、国の発展過程で直面する様々な問題を解決していかなければならない。

中日間の交流はあらゆる面から促進していかなければならないが、私はこうした交流に対し、とても楽観視している。なぜなら中日両国の人々には多くの共通点があり、また多くの交流に対する需要が存在しているからである。

大学名： 清華大学

氏 名： 李維唐

テーマ： 4.日中間の交流

日本と中国は一衣帯水の隣国であり、両国間の交流の歴史は長きに渡り続いている。経済のグローバル化により各国の繋がりが日増しに緊密になっている今日、中日両国は本来より協力を深め、共に発展や進歩をしていかなければならないが、両国関係は終始、近・現代の歴史における一部の未解決の問題の影響を受けており、今後の改善の余地は大いに残されている。

多くの中国人にとって日本は鬼に近い存在であり、思い浮かぶ印象は常に日本刀を持った冷酷無比な日本の将校である。これは中日間に交流が不足している表れであり、今回8日間の日本での生活を通じて、私は日本の国、日本の民族について様々な角度から深い理解をすることができた。私はこの民族の漢族と源を同じくする文化に共感しただけでなく、さらに日本人の優しさやおもてなしの心、そして彼らの中日関係の改善を願う切実な思いを感じることができた。

予見可能な将来において、中日関係の改善には依然として私たちが多大な努力を払わなければならず、また紆余曲折もあるだろうが、両国関係が低迷している時こそ、両国間の交流を継続していくことが必要である。なぜならこうし

た状況の時こそ、私たちは互いへの敵意や固定観念を取り払い、どうしたら本当の意味で両国の人々の幸福を追求できるのかを真剣に考えなければならないからである。

私はこれから先、中国に来る日本の大学生をもてなす機会があることを願っている。教室で彼らと人生や目標について語り合い、彼らを家に招いて本場の中国の料理を味わってもらい、また彼らにおおらかで、温もりのある中国を感じてほしいと思っている。

大学名： 清華大学

氏 名： 陳文鋸

テーマ： 2. 集団帰属意識の強さ

「学生たちの観た日本」において、私は主に日本企業への印象を記したいと思う。私たちは今回、島津製作所、アサヒビール、伊藤忠商事、みずほ銀行、ホテルニューオータニの計5社の日本企業を見学した。その中でとても感動した点としては、各社はそれぞれ異なる業種に属してはいるが、真剣に事業に取り組み、社会に貢献するという共通の企業精神を持っていたことである。島津製作所の「科学技術で社会に貢献する」、アサヒビールの「最高の品質をお客様にご提供する」であれ、また伊藤忠商事の「三方よし(売り手よし、買い手よし、世間よし)」であれ、つまりは企業が自らの事業を真剣に行い、社会の一員として自身のすべきことを成すことにより、人々へ奉仕し、また社会へ貢献するということである。私は、こうした精神が多くの日本企業の長寿を支える源であり、またこうした真剣な態度は各スタッフの心にも根付いていると感じた。正に彼らの企業精神への共感や帰属感が、こうした企業精神をスローガンや教義としてだけに終わらせず、企業全体の行動規則として徹底され、彼ら自身の仕事の完成や社会への貢献につながっているのである。

大学名： 清華大学

氏 名： 殷晨

テーマ： 3. マナーのよさと思いやり

出会った時には互いに挨拶を交わす。たとえそれが面識のない人であっても、互いが微笑みをたたえて会釈をする、公共の場では電話に出ない、しっかりと列に並び他人へ迷惑を掛けないなど、これらは私が今回日本で身を以って体験したことである。日本人は、マナーと他人への思いやりを日常生活において極限まで高めており、こうした雰囲気の影響を受けた私も、場所を問わず会釈と微笑みで他人への感謝を表し、またいつ何をするにもまず他人の気持ちを考え、またエレベーターに乗る際は、全員が乗るまでドアを開けたままにし、公共の場では大きな声を出さず、ホームステイ期間中は数えきれないくらいのお辞儀と感謝の言葉を口にするなど、これらを積極的に行うようになった。

日本人はいつからこれほど他人を思いやるようになったのかは分からないが、日本の厄介なマナーについては早くから知っていた。そして今回日本において、初めて本当の意味で大和民族の偉大さを感じた。日本人には非常に多くの公共意識があるが、これは正に現在の中国の人々に不足している重要な素養の一つであり、この素養は往々にして最終的な国民のイメージを決定付けるものである。但し、これには日本の民族は比較的単一であるため、文化的な共通点が多く、互いが理解しやすいという理由もあるかもしれない。それに対し中国の56の民族においては、各民族間の文化的な違いがとても大きく、日本のような各人が高いレベルに達することは、それぞれの基準が違うため難しい

と思われる。皆は常日頃「国民の素養を高めなければいけない」と愚痴をこぼしているのは間違いないが、従来の悪習は昔の閉鎖的風習の名残であり、現在は多くの中国人が外国を訪れ、理解が深まることで自然とそうした環境に適応するようになった。現在世界各地において、中国語での「注意書き」が次第に少なくなっていることは、私たちの進歩に対する肯定でもあるが、日本の人々と比べると、私たちが他人を思いやれる場面はまだ多い。

完全な「日本式」のマナーの実現は中国では難しいが、「中国式」のマナーはこれからさらに進歩させることができる。中国は経済発展と同時に、国民のマナーも共に進歩するものと信じている。

大学名： 清華大学

氏名： 万正一

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

今回日本を訪れ、日本人のマナーと他人への思いやりについて感じる事ができた。

私はホテルでの滞在期間、企業見学そして日本でのショッピングなどいずれの際にも、入室時の挨拶、会釈、お辞儀、ドアを開けるサポート、エレベーターのドアが閉まらないよう抑える、お別れの際には視界から消えるまで手を振るなど、スタッフのマナーを感じる事ができた。何かを尋ねればとても丁寧に教えてくれ、もし私たちが何かミスをした場合でも、彼らは厳しく叱るのではなく、微笑みをたたえながら話をしてくれる。もちろんサービス業においては、こうした行いについて褒め過ぎてはいけないと思う。と言うのも、中国の高級ホテルやサロンのサービスマナーは日本と変わらないからである。但し日本の素晴らしいところは、こうしたマナーがハイクラスのサービス業だけに限らず、普通の家電売場や小さいコンビニエンスストア、またレストランなどでもこうしたサービスが受けられ、しかも誰に対しても平等で、外国人を差別することはないのである。路上や車内、エレベーターの中で見かける一般の日本人も皆マナーが良く、常に会釈をしており、こうした環境で生活することは人としての尊厳が守られ、他人からの尊重を感じることができると思った。

日本人の他人への思いやりも印象深いものがあった。前を歩く人がドアを通る際には後ろを歩く人を気遣い、エスカレーターや電車内にいる人は自分が他人の通る道を塞いでいないかを気に掛け、車内の人にはイヤホンで何かを聴く際は、周囲の迷惑にならないよう音量を下げるのである。またより感心したのは、他人への思いやりがあらゆる施設の設計にも取り入れられていることである。例えばトイレの傍には清潔さを保つため洗浄剤が備え付けられ、温泉内のシャワーには仕切りが付いており、さらに座った状態で利用するため、水が他人にかかるのを防ぐことができる。要するに、あらゆる設計はとても気配りやサービスが行き届いているのである。日本の教育における一つのポイントとして、他人へ迷惑をかけないことが挙げられる。現在、日本の社会ではこうした考え方が実践され、他人を思いやっている。だからこそ日本の社会はこれほどまでに調和がとれ、人と人との争いも少ないのである。

大学名： 中国人民大學

氏名： 于孟鑫

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

日本人はこれまでずっと緻密さと礼儀正しきで名高く、日本語を専攻する私はこれまで書籍で何度も、日本人が他人へ迷惑をかけることを嫌っているといったマナーについて学んだことがあるが、実生活において彼らが本当にそうなのかについては常に多少の疑問があった。今回私は直に日本社会を体験し、教科書での知識以外に新たな認識を

得ることができた。

日本人はきめ細かいが、実は中国人もきめ細かいのである。私について言えば、私自身も多くの細かい点に注意し、またこれらを気にもするが、常にそれを覚えているというわけではない。それに対し日本人は、ある点に注意した場合、常にそれを気にかけて、さらにあらゆる手段を尽くして解決しようと行動に移すのである。

日本人は相手のことを優先的に考え、自分の事は二の次である。こうしたところは日本のあらゆる施設の人への優しさやサービススタッフの態度の素晴らしさに表れている。またホームステイの際、私が初来日ということで、日本人との習慣が異なることを気にかけてホストマザーは、常に私の考えを遠慮せずに話してほしいと声をかけてくれた。そしてホームステイについては、私の日本人の一般的な生活を体験したいという希望に沿ってスケジュールが組まれたのである。

日本人は、人や物事へ接する際とても礼儀があるが、私は、これはつまり最も心地良い態度で、人との最も心地良い距離を維持しているのだと感じた。日本人は温もりのある笑顔で人と人との隔たりを取り除き、相手を気遣いこそするが、困らせることはない。サービススタッフであれ一般の人であれ、皆が人と人との距離感をうまく調節している。

大学名： 中国人民大学

氏名： 倪楠

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

周知のように、日本民族はとてもマナーを大事にし、常に他人を思いやる民族である。初めて日本を訪れた私はこの点をとても強く感じた。また日本の様々な面や細部などは、いずれも日本の国民性を表していた。

日本に到着し飛行機から降りた私が印象深かったのは、日本ではどこのガラスも埃一つなく綺麗に磨かれているということである。ガラスを綺麗に磨くこと自体は難しいことではないかもしれないが、あらゆるところがこれほど綺麗だということに、私は畏敬の念すら覚えてしまった。透き通ったガラスのおかげで自由に窓の外の景色を楽しむことができるので、旅の最初から視野が明るく広がるような良い気分になった。この他、私はいくつか日本のマナーへの重視と他人への思いやりを表す細かな部分を発見した。多くのトイレには用を足す際の音による気まずさを避けるため、その音をマスキングする擬音装置が付いている。またヨーグルトの蓋には特殊加工がされ、ヨーグルトが蓋に付着しないようになっており、公共の場所でヨーグルトを飲む際に蓋を舐める見苦しさや蓋を舐めないことによる浪費といった悩みを免れている。さらにホテルの化粧室の鏡の一部には曇り止めがされ、いつでも使うことができるといったことである。あらゆる設備の周到さと人への優しさは、常に自分への尊重と気遣いを感じさせてくれる。

恐らく、日本人にこうした性格が生まれたのには、その昔からの社会と一定の関連性があると思う。昔は交通が不便であったため、日本人は自分の生活する場所を離れることはほとんどなく、顔なじみ社会であったため、集落の各人は皆より良く生活するためには、周りの人と良い関係を築かなければならなかった。そのため、常に礼儀正しく他人へ接し、さらにどうしたら相手の気分を良くできるかを常に考え、他人へ迷惑をかけず、それが次第に日本人の習慣となっていた。そしてこうした習慣が製造業やサービス業などにも広がり、今日の日本のあらゆる面における人への優しさといった特徴が形成されたのだと思う。

今回の貴重な訪問において、私はこうした細かな視点からより深く日本の国民性について知ることができた。私はその長所を吸収し、帰国後に友人に紹介することで、彼らにより深く日本を知ってもらおうと思う。

大学名： 中国人民大学

氏 名： 史蕊

テーマ： 1.国民性についての理解

国民性：

- 1、積極性や向上性があり、生活を心から楽しんでいる。街中で道を尋ねたり、または店で買い物をしたりする際に何かを尋ねると、日本の人々の態度はとても親切で、いつも私たちに笑顔とポジティブさを与えてくれる。これは彼らがいかに自分の気持ちをコントロールでき、楽観的で向上性があるのかを物語っている。
- 2、イメージを重視し、マナーを心掛ける。日本のサラリーマンは、出勤する際いずれもスーツを身に付けており、活力や優秀さといった印象を与える。しかも、日本の女性は身だしなみや化粧に多くの時間をかけ、最も美しい一面を他人へ見せる。これは自分を大切にすると同時に他人を尊重する表れだと思う。
- 3、自発的で、国家意識がある。すべての人、すべての家庭は国を構成する最小単位であり、個人が良ければ全体も自然と良くなる。正に日本ではすべての人が衛生面に気を付け、ごみを分類し、自発的に列に並ぶため、この国は綺麗で秩序立っているのである。
- 4、親切で客好きである。私たちが企業や大学の訪問を終えてその場を離れる際、企業のスタッフや学生は私たちの車が視界から消えるまで手を振って別れを惜しんでくれた。まさにガイドの方が言うとおりに、日本人のこうした誠意は相手の心を和ませるものであり、確かに私たち一人ひとりの心は感動でいっぱいになっているのである。
- 5、信仰を重んじ、それを確実に伝承している。日本の文化であれ、または日本の企業の理念や初心であれ、いずれも見事に伝承されている。日本人は神社や茶道などの伝統文化についてこれまで先祖代々伝承を続けている。企業も終始長期的視野で段取りを踏んで事業を継続している。これも日本の多くの大企業が100年以上も発展を続けている理由であろう。
- 6、着実に落ち着いている。日本人は新たな発見があればそれを継続して研究し、たとえ何度も失敗しても、またたとえ一生涯研究が終わらないとしても研究を続けるのである。これも日本人が多くのノーベル賞を受賞している理由であろう。

大学名： 中国人民大学

氏 名： 鄭雨奇

テーマ： 4.日中間の交流

日中両国の交流に関して、私は今回の日本訪問を通じて、主に以下の感想を持つことができた。

最初は、日中両国の交流における潜在力はまだ完全には発揮できていないということである。しかも日本の人々の中国への理解度は、中国の人々の日本への理解度には遠く及んでいない。ガイドの方や薛参事官からの情報によると、現在日本を訪れる中国人観光客の数は、中国を訪れる日本人観光客の2倍である。そのため、この点も双方の理解度の不均衡という問題をもたらしている。また、ホームステイ先の男の子からは、彼の周りにはまだ中国人について知らず、別の考えを持っている人がいることを知り、ホストファザーからは、メディアにおいては日本の人々が正しく客観的に中国を理解できるようなニュースがとても少ないため、日本の人々の中国への認識の偏りをもたらしているとの話があった。これらはいずれも、中国の人々の多くがこの問題をまだ理解していないことを物語っている。

次に、日中両国の交流には様々な問題が存在しているが、双方とも日中交流への努力をしており、特に若い世代の人々は、必ず日中交流を促進し、明るい未来をもたらすことができるということである。こうした感想は主に二つの方

面がその理由となっている。一つ目は、今回これほどたくさんの優秀な企業が私たちの見学を歓迎してくれたことで、これは彼らが私たちとの交流を望んでいることを物語っている。しかも、島津製作所やみずほ銀行などの企業紹介においては、中国市場は彼らにとって非常に重要であることを知った。そのため、彼らは必ず中国との交流を心から歓迎するはずである。二つ目は、京都大学と早稲田大学での交流において、彼らの心を込めたもてなしと親切さを感じたことである。しかも彼らとの交流はとても楽しく気楽で、まるで国の違いなど関係なく、私たちは皆単に青春の活力と無限のアイデアにあふれる大学生だという雰囲気であった。私たちは皆自身の理想や抱負を持っており、それを実現するために頑張っている。日中両国の将来を構築する当事者である若者世代の大学生が、これほど自然に楽しく交流できるのであるから、数十年後の両国の交流はきっと頻繁になり、両国の関係も良くなっていると信じている。そして日中両国の交流もまた、双方の努力によりきっと明るい未来になっているであろう。

大学名： 中国人民大学

氏 名： 鐘錦涛

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

日本に来る前、私が日本人について耳にしていた見方は主に二つに分けられる。

一つ目は、私の先生やその他日本のとある部分(例えばアニメや日本のドラマまたは化粧品や薬品など)をととても評価しているタイプの人で、彼らは日本人がとても礼儀正しく、常に他人へ迷惑をかけないように人と接し、他人は私のために、私は他人のためにという状況が出来上がっていると考えている。

二つ目は、日本に対して比較的反感している人で、彼らは日本人が冷淡そして偽善的で、毎日礼儀がある振りを装っているがその実は陰湿だと考えている。

そして実際に日本人、特に一般の日本人やまたその家庭と関わり交流した後において、日本人の国民性について考える時、私は中国と日本という単純な区別の方法は捨てた方が良いと思う。なぜなら日本人の国民性とは、まず日本人それぞれの個人に対して確立されるもので、その上でこの国の社会や文化により次第に感化されるものだからである。人には喜怒哀楽があり、それは日本人も例外ではない。マナーや他人への思いやりといった文化が骨の髄まで染みて、それが一つの習慣となった時、私たちはそれを偽善だということはできないのである。彼らにも喜怒哀楽があり、また愚痴をこぼすことはある、ただネガティブな感情の際、彼らは自分の気持ちを考えるだけでなく他人の気持ちも考えるため、辛抱強く、また感情を抑えているように見えるのである。これが日本の国民性に対する私の最も本質的な理解である。

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 江涵

テーマ： 4.日中間の交流

今回の活動に参加する前から、私は日本人のマナーへの重視度合について聞いていたが、実際に日本に到着して私は初めてそれを実感することができた。

日本の人々のマナーへの重視度合は、実際のところ様々な要因が絡み合った結果であり、道徳やルールといった側面だけに留まるものでは絶対でない。素晴らしい国民の素養、一流の教育水準、完全な社会や法律の制度、発達

した経済レベル、完備されたインフラなどの要素が、共に現在の日本人の世界において称賛されるマナーの良さというイメージをもたらしたのである。もし単純に「他人へ迷惑をかけない」ということと言った場合、それは簡単に聞こえるが、実はそれには常に他人を思いやるという配慮を内包しているのである。私が日本に来て目にしたきれいな道路、清潔なトイレ、整然とした公共スペース、食事後に椅子を元に戻す、ごみのきれいな処理、これらは自然に形作られたものではなく、長きに渡るルールの教育や社会的宣伝の結果であり、また経済発展により人々の生活レベルが向上したことによりもたらされた、より高い精神面の追求の結果でもある。私たち中国には環境を代償とした経済発展の例は数多く、社会で共有すべきルールを脅かしながらも、それを気にしないことによりもたらされた物質を重んじ精神を軽んじる傾向もまた数多く存在する。ここで私たちは歩みを止めて、いかにしてバランス良く発展することが本当に必要で、さらに持続可能なものなのかを考えるべきだと思う。勿論これは私たちの問題であり、私たちが絶えず変化を追求し続けている。対外的な交流において私たちは、こうした変化を願い、また努力をしている姿勢を世界に伝えなければならない。交流を通じることで、私たちは日本を知り、また日本にも私たちを知ってもらわなければならないと思う。

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 呉佳芮

テーマ： 4.日中間の交流

2016年5月24日、私は日本での7泊8日の訪問を開始した。日本という国について語る時、私たちの以前の教科書であれ、または歴史であれ、いずれも多くのネガティブな事実が存在している。昔、私たちが見たのは侵略者としての日本であるが、今現在、私の目の前には真実の、そして発展を遂げた日本がある。覚えるべきは覚え、水に流すべきは水に流し、学ぶべきは学ぶ、これこそ私たちが交流の際に厳守すべき原則である。

ホストファミリーとの交流の際、私は彼らの中国への多くの誤解に気が付いた。例えば私が現在北京在住という話をしたところ、彼らの最初の反応はPM2.5の数値がとても高く、環境もとてもひどく、生活には適さないというものであった。そこで私はすぐに彼らに対し、日本は島国なため埃は少ないが、北京は大陸なため埃が比較的多く、さらに現在北京も環境が改善されており、青空も常に見かけることができると説明したところ、彼らは自分たちの中国への認識が数十年前のものであると気が付いたのである。今回の経験を通じて私は、交流の際私たちが傲慢にも卑屈にもなってはいけないと気が付いた。私たちは、彼らの先進的技術や理念を学びに来てはいるが、一部の技術については実は私たちが優れたものを有しており、ただ私たちが知らないだけなのである。交流は双方向のものであり、平たく言うと、彼らを褒めつつ彼らからも褒められることが必要で、彼らに中国が一体どのような国なのかを知ってもらわなければならない。

今後こうした交流活動が増えていくことを願っている。日本への訪問だけでなく、中国への訪問も必要である。日本の先進的技術や非常に高い国民の素養、そして資源の節約という意識はもちろん私たちが学ばなければならないものだが、中国の発展と進歩についても日本人々に知ってもらわなければならない。互いに学び、成長し合うことが必要ではないだろうか？

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 王雨薇

テーマ： 2.集団帰属意識の強さ

ここでは私にとって印象深かった2つの点から、日本の集団意識についての感想を述べたいと思う。

一つ目は、ホームステイの時に私がこれまで関心を持っていた日本企業の終身雇用制の問題について、ホストファミリーと話をしていた時のことである。日本に比べ、中国の離職率は数倍も高く、転職は現在のほとんどの若者が経験しており、企業側も人材の流出を避けるための奨励制度を設けている。私がとても気になっていたのは、もしスタッフが解雇される心配がない場合、より良い企業へ転職するというモチベーションも生まれず、彼らは果たして全力で仕事と向き合うのか？ということであった。私のこうした疑問を聞いたホストファミリーは驚いた表情を見せ、当然のような口ぶりで、努力をするのは当たり前のことではないのか？努力をしていない人はいるのか？と尋ねてきた。彼の反問に私はとっさに何と答えたらいいのかわからなかったが、この点から、私は各個人の会社への帰属感を垣間見ることができた。

二つ目は、島津製作所を訪問した時のことである。私たちが島津創業記念館の見学をしていた時、私は、とある点に気が付いた。島津製作所の創業当初はちょうど明治維新後であり、国は「殖産興業、教育立国」の政策を押し進めていた。そこで島津製作所の創業者は時代や国の求めに応じ、教育用の物理・化学計器の生産を開始し、そこから会社は商業の帝国と呼べるまでに発展したのである。この点から、私は各企業の国への帰属感を垣間見ることができた。

これは2つの些細なケースではあるが、私たちはそこから全体像を見ることができる。私たちは個人がいかに関業に貢献するか、企業がいかに関業に貢献するかを目にすることができ、さらに利益共同体という集団主義についても知ることができた。このような日本という国が強くない理由はないのである。

大学名： 对外経済貿易大学

氏名： 黄静

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

一国家の国民の精神の中にある優れた品性は、どのように培われるのか？それは明らかに幼少時から培われている。

私のホームステイ先は、一戸建て住宅に住む一般的な日本人家庭で、子供への教育も厳しく行われている。この一家には二人の女の子がいて、一人は8歳、もう一人は7歳といずれもまだ小学生でありながら、帰宅後にはまず先に手洗いをし、公共の場所でははしゃいだりせず、また大声を出さず、自発的にお客さんの手荷物を持ち、他人の妨げになった際はすぐに謝るなど、とても礼儀正しく、元気がありつつも賢いのである。それに対し、同年齢の中国の子供は日頃から「いたずらっ子」と呼ばれている。この他、日本の家庭では子供の自立性の育成にとっても気を使っている。外食の際、ホストファミリーはお子さんに会計をさせていた。そして私が彼らの自宅にいる時は、お子さんに私を連れて家の中を案内させ、お風呂の準備や様々な注意点の説明についてもお子さんが対応していた。小さな頃からこうした訓練の中で成長した子供というのは、当然ながら親切で自信に溢れ、人や物事への対応がうまく、さらに物分かりが良く思いやりを持つのである。

この他にもまだまだたくさんある。ホストファミリーは散歩の際に、お子さんへ色々な動植物について話し、環境保護の大切さを教え、ホストファミリーはお子さんと私の記念アルバムを作っている時に、人と人との関係を大切にしよう教えていた。これらの素晴らしい気質の育成は、小さな頃から行うべきである。優秀な子供こそが一国の優れた未来を創ることができるのである。また本来礼節を重んじる国である中国は、反対にこうした教育を次第に軽視している。この点は真に私たちが考え、さらに日本に学ぶべきものだと思う。

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 何鑫穎

テーマ： 4.日中間の交流

8日間のスケジュールはあっという間に終わった。この8日間の中には、多くの感動と驚きがあったが、最も多かったのは日本という国についてのより深い認識であった。

私が日記の中で述べたように、日本で最も感動させられたのは、この国が心から発する温もりである。彼らのあらゆる設計、すべてのわずかな所作、これらはいずれも彼らの他人への思いやりを表している。私は、中島さんの言った、日本の土地は私有地だからこそ皆が周囲の環境を含めて心から大切に扱い、自宅前の雪かきなどから始まり、日本の国全体の環境がとても整然としているのではないか、という言葉は言い得て妙だと思った。

国情が異なるため、中国では日本の人々のような丹精込めた保護はできないかもしれない。しかし私が言いたいのは、日本は必然的に多くの非常に進んだ面を持っているが、私たちは中国の実状を知らない状況において、自らを過小評価すべきではないということである。日本の企業は確かにとても現代化が進んでいるが、中国の企業自体も劣っているとは限らないのである。私たちは中国の工場や企業を実際に見たことがないのに、どうして中国は劣っていると簡単に言うことができるだろうか？今回日本に来てから、私は日本にも電車内で騒ぐ人や、あまり親切ではない人がいることに気が付いた。中日双方のメディアはあらゆる手段で双方のネガティブな情報を発信している。だから中国人の目には、日本は歴史を否定するがそれ以外は素晴らしい国となり、日本人の目には、中国は成金が多いが不衛生で乱雑で劣っている国となっているのである。

これはとても残念な事である。中日両国は世界における第二・第三のエコノミーであり、永遠の隣国として、もし互いが助け合い、また交流し、EUのような協力や共同発展といったアジア共同体を作ることができなければ、それはアジア全体ひいては世界にとっても非常に大きな損失である。

だからこそ私たちは、中日双方が互いを尊重し、より多くの本音で話ができる人が中日双方の交流に関わり、ますます多くの民間交流が両国の政治上のわだかまりを解消できるよう願っている。まさに大使館の薛参事官が述べたように、もし歴史に拘ってだけいけば、私たちはどうやって進歩、また発展し、さらに互いの経済低迷期を乗り越えることができるのだろうか、ということである。

私たちは見学者であり、また発信者でもある。中国はすでに胸を張って他国と付き合えるほど成長している。中国は現在、発展におけるボトルネックの時期にあるが、私たちは中国がいつか緑に溢れ、企業も100%のリサイクルを実現し、人々も自発的にごみの分類をするようになると信じている。

中日交流については、中日友好協会や中国日本商會が努力を続けているが、今回共に感じ、体験した私たちも努力をしていかなければならない。共に未来を歩んでいこう。

大学名： 北京第二外国語学院

氏 名： 胥珂

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

中国には「百聞は一見に如かず」という言葉がある。日本語学院の学生である私は、これまで普通の勉強や生活において日本文化に関する多くの文献や映像などに触れ、また日本人の教師とも交流があり、日本や日本人というもの

について多少の認識があった。しかし今回の訪日では、私はさらに直に、また深く日本人について知ることができた。

まず電車内といった公共の場所では、これまで話に聞いていた誰もおしゃべりをする人がいないといった大げさなこととはなかったが、皆は意識的にイヤホンの音量を下げ、子供が騒いだ場合は父母が小声でたしなめていた。但し地下鉄内では電話に出ないということについては、実際に体験することができた。私とホームステイ先のえりこさんが地下鉄に乗っていた際、彼女のお母さんから電話があったが、彼女は何のためらいもなく電話を切ったのである。その手慣れた動作から、私は彼らにとってこれは日常的事物なのだろうと思った。さらに日本では自動車が歩行者に道を譲るが、こうした点は中国ではまだまだで、日本に学ぶべきだと思う。そして他人へ迷惑をかけない、他人を思いやる心である。随行撮影の監督さんが、私の足が靴擦れしたのに気付いて絆創膏を買ってくれ、えりこさんのお宅に戻った後、えりこさんは薬を塗ってくれた。そして次の日散歩に出かける際、えりこさんのお母さんはわざわざサンダルを準備してくれた。これには少し申し訳なく思ったが、また心が温かくなる思いもした。そして私たちも、いかなる場合においても他人の気持ちを思いやり、他人の立場になって物事を考えなければならないと思った。こうした「思いやり」の心は、人と人との距離をさらに近づけることができるのである。

松本楼の小坂女史からの紹介にあった梅屋庄吉氏と孫中山氏の友情と同様、中日両国の人々が友人となりさえすれば、国と国の関係もきっとより打ち解けると信じている。また、私たちのような大学生が日本を訪問する以外にも、私たちをもてなしてくれたご家族が中国を訪問、または日本の大学生が中国に見学に訪れるような機会があることを願っている。まさに中国大使館の薛参事官のお話にあったように、交流とは双方向のものでなければならず、そうしてこそ互いが情報の不均衡や偏りによる誤解を避けることができるのである。この「走近日企・感受日本」の活動は本当に素晴らしい活動であり、今回の活動に携わった中国側・日本側双方に心から感謝したい。私は、いつかきっとこうした努力が実を結ぶ日が来ると思う。

大学名：北京第二外国語学院

氏名：熊瑋

テーマ：3. マナーのよさと思いやり

日本人の「思いやり」に対する私の理解を紹介したいと思う。私は今日の歓送会の席上、「人という生き物は互いに支え合い、助け合うことでのみ生存が可能である。孤島(孤独)でいられる人はいない。他人の角度や立場に立って物事を考え他人を手助けする、これつまり『思いやり』の意味するところである」と発言した。

他人を手助けする光景は至る所で見られる。段差を登れない障害者を登れるよう手助けする、商品が見つからないお客さんが商品を見つけられるよう手助けする、しかもお客さんを自らその場所へと案内する、他人のためエレベーターのドアを支えるなど、こうした「思いやり」に溢れた状況はたくさんある。日本では、誰も「孤島(孤独)」ではなく、彼らは一体となっており、「大きな島」だと言える。

ホームステイの二日間、私のホストファザーの他人への思いやりには驚かされた。私は静かな環境が好きだと言っていたので、二日目、彼はなんと私の休憩の妨げにならないようテレビの音を消していたのである。また私が家庭的な味を味わいたいと言うと、彼は自らうどんを作ってくれ、私が普段の本当の日本の様子を知りたいと言うと、彼は私を屋上の公園に案内してくれ、そこで東京の人波を見ながら、静かに人生について語り合ったのである。こうした感覚は言葉では表現することが難しく、まるで風が吹き、急に眠気が襲い、うとうとするも、たとえそれが荒野でも心が落ち着くような感覚であった。

「予人玫瑰、手有余香」(バラを他人へ贈っても、自分の手には良い香りが残る。他人を手助けすれば自分もまた楽しい、の意)。つまり、日本とはこうした芳しい国である。日本でこのような経験ができた私は、今回体験し、また感じたことのすべてを帰国後に紹介することが今から待ちきれない。

大学名：北京第二外国語学院

氏名：鄒璐璐

テーマ：4.日中間の交流

今回の交流活動の中で、私にとって最も印象深かったのはホームステイであった。日本の一般家庭において交流ができたことで、私はこのホストファミリーの私への友好的な態度を感じた他、さらに普段の会話の中から日中両国の共通点や相違点を見つけ出すことができ、互いに相手国への興味を示すことができた。私は、これもまた両国の友好的な付き合いにおけるスタートと言えるのではないかと思う。

日中間の交流について言えば、今回の訪日を通じて、企業や大学との交流では、多くの私たちが学ぶべき点を見た他、共通点や相違点も見つかった。私は、互いに交流し学び合っこそ共に発展していくことができると思う。これがつまり交流の本質である。もちろん交流は双方向のものでなければならず、互いに理解し合っこそ、持続可能な発展ができるのである。

中国の人口は15億に達し、日本も1億3千万の人口を有している。また未解決の歴史問題などがあり、部分的に対立が存在するのも理解できる。もちろん、その際一番してはいけないことは、対立自体を見て見ぬ振りをするのであり、この時に交流の重要性が表れてくる。交流を通じて、各自が最大限の努力によって問題を解決してこそ、互いが仲良く、長きに渡り平和的に付き合うことができるのである。

関連データによると、現在中国における日本への旅行者の数は、日本における中国への旅行者の数の2倍以上で、これはちょうど10数年前とは逆の状況となっている。中国人旅行者客が爆買いをするといったニュースも多く見かけるが、良い面からみると、中国人が日本へ行くことを好んでおり、これも両国間の交流を大きく促進していると言える。同時に、両国が派遣する友好交流団なども次第に増えており、国民間の交流の可能性を高めている。

確かに忘れてはいけない事もあるが、そうした事は日頃から触れるべきものではなく、やはり前向きにならなければいけない。そのため、中日両国がどのように発展しようとも、最も重要なのはやはり交流なのである。

大学名：北京第二外国語学院

氏名：許禄野

テーマ：1.国民性についての理解

2.集団帰属意識の強さ

4.日中間の交流

今回の8日間の訪問の旅を通じて、日本への認識をより深めることができた。私は日本語を専攻しており、かねてから日本の国民性についてはある程度知っていたが、私は彼らの高い団結力やマナーは驚くべきものだと感じていただけであった。そして今回の8日間の観察を通じて、私を驚かせた彼らの品性の源を理解することができた。

企業への訪問やホームステイ時のバーベキューなどから、私は日本人それぞれにある強い自己アイデンティティを感じる事ができた。これは私たちが日常言う自惚れとは異なる一種の簡単な存在感である。役職の高さや低さは関係なく、皆が自分のすべきことをこつこつと行っている。日本人は、自分のすべきことをやり遂げれば、より素晴らしい環境を構築できると信じており、これも正に日本人が他人へ迷惑をかけることを嫌う理由である。この他、日本人の礼儀について強く感じる事ができた。たとえ夫婦間であろうと、常に「ごめんなさい、ありがとう」などの言葉を口にしていた。私のホストファミリーには一歳半になる女の子がいて、ホストマザーが子供をあやし終えたと、ホストファザーは申し訳なさそうに「ごめんなさい、お疲れ様」と声をかけた。これは中国では絶対見かけることがない光景である。

礼儀はすでに日本人に染みついているものであり、これも私が感服した点である。

次に、今回の訪日では交流の重要性について感じる事ができた。こうした簡単で友好的な国民間の交流は、十分に双方を感動させ、互いの相手への印象を変えることができるのである。こうした行いは偉大であり、多くの意義を持っている。中日両国は一衣帯水の友好的な隣国同士であり、国民の交流が盛んになっている今日、中日両国間の経済、政治、文化といった各方面の交流の強化もその必要に迫られている。今回の交流を通じて、私にはこれまで以上に中日両国が必ず友好的な付き合いができるという確固とした信念が生まれ、また中日友好に対して自分の力を捧げるという志を立てることができた。

大学名： 北京第二外国語学院

氏 名： 袁偉傑

テーマ： 4.日中間の交流

「学生たちの観た日本」について書く時、まず私は何を「テーマ」とすべきか考えた。正に私たちがこの数日間において自ら日本に身を置き、日本の企業や家庭に溶け込み、観察し感じたたくさんの事であり、ここでは簡単にしか述べる事ができない。

日中間の交流について述べてみたい。京都大学と早稲田大学の同世代の人間同士の交流を例にすると、私は言語と交流は、絶対的に人と人との間、また国と国との間にある壁を取り除くための鍵であることに気が付いた。今回日本を訪れた学生の中で日本語を学んでいる人は日本語で交流し、日本語ができない人は英語で交流したが、いずれの言語であっても、外国語の一つ以上精通することの重要性を認識することができた。現在は若い世代の交流がより重要視されており、王先生や朱団長も若者には無限の可能性があると話をされ、しかも日本の大学生は思考が幅広く、他人との交流や中日間の友好促進を望んでいる。私はもし日中間において若い世代の人々の相互交流が強まれば、中日間の関係はますます良くなると思う。それから企業での交流について言えば、企業のスタッフとの交流では、現在の中国市場の日本企業における重要性がいかに高いかを知ることができた。多くの企業は自社スタッフに中国語を習わせ、さらに研修のため中国に派遣しているのである。

いずれにしても、中日間の交流は両国の発展に直接関わるものであり、こうした良好な交流を維持していけば、両国関係は今後さらに堅固になると私は思う。

大学名： 中央民族大学

氏 名： 龍順欣

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

「走近日企・感受日本」の文字通り、今回の交流活動のスケジュールは企業見学が主で、さらに学校間交流やホームステイなどが加わったものであった。8日間の活動において見聞きし、また感じたことのすべては、私にとある共通した一つの感覚をもたらした。それは、日本が百年以上の発展により積み重ねてきた資本や優位性は多種多様で、そうした各方面の資本や優位性は、日本人一人ひとりに反映されており、特に彼らの素養や教育レベルに反映されてい

るということである。

私たちが見学した企業や工場には、みずほ銀行のような巨大金融機関もあれば、島津製作所のような優れたハイテク企業もあった。また伊藤忠商事では、日本最大規模の総合商社の本部についての見識を広め、アサヒビール神奈川工場では、市場や消費者の生活に密着した飲み物の生産ラインを目の当たりにした。しかし役職の高さや仕事の内容とは関係なしに、すべての日本人からは同様の友好的態度や集中力を感じることができた。友好的態度は、私たちゲストへのもてなしや、会社の同僚同士の交流や協力といった面にも表れている。集中力は、即ち日本人の仕事に対する最も基本的な精神状態である。このような企業組織やスタッフの状態の企業に対する最も顕著な影響は、各生産・経営段階への重視である。つまり経営陣だけでなく同様に現場も重視し、さらに商品の生産だけでなく廃棄物の回収処理も同様に重視している。実のところ、日本人のこうした仕事への態度や人間関係といった組織については、私たちは早くから耳にしていた。しかし実際にそれを経験して、日本人の友好や集中力の度合、またこれらの普遍性が私たちの想像を超え、私たち中国人とはかなり違う程度に達しているということが分かった。そのため、私たちはこうした「国民性」への認識を、私たちにとって一般的な「高い基準で自分を律する」ことにおける「克己復礼」のレベルに留めてはならず、その背後にある日本特有の歴史的・社会的原因を探らなければならない。

一個人にとって、世界観の確立は常に現在の社会の影響を受けており、その形成には数年または数十年が必要で、しかも一旦形成された後は変わることは難しい。これは、人口の絶対値が膨大な中国全体の変化には、時間が必要だということを意味している。そのため、私たちは一方では自らを卑下する必要はなく、もう一方では功をあせる必要はないのである。来るべきものはいつか必ず来るのであり、歴史の判断は常に私たちよりも正確なのである。

大学名： 中央民族大学

氏 名： 李欣竹

テーマ： 3. マナーのよさと思いやり

わずか約一週間の活動ではあったが、私が日本人について最も印象深かったのはマナーである。フライトアテンダントやホテルのサービススタッフといった人から、一般の日本の人々まで、すべての日本人は礼儀正しかった。関西国際空港で私が不注意でとある女性にぶつかってしまった時、私が謝ろうとするより先に彼女が私に謝ってきた。そしてホームステイでは、優しくて気立てのよい日本女性とは何なのかを本当の意味で知ることができた。一家全員私に良くしてくれ、嫌な顔一つせず二人のお子さんを連れて私の買い物に付き合ってくれた。また4歳の娘さんは特に、あちこち歩き回っても泣き叫んだり、熱がったり、疲れたりした様子も見せていなかった。また外出の間、私はホストファミリーに日本人は外を歩いている時には物を食べたり、たばこを吸ったりしない事について聞いてみたが、最初は彼も特に意識していなかった。おそらくこれは、習わしが広まって一般的になった日本人としての簡単なマナーなのであろう。

日本人は他人への真の思いやりを心得ている。全体的に日本の道路はとても綺麗であり、繁華街や公衆トイレでさえも例外ではない。ほとんどすべてのトイレには使用音をマスキングする「水の流れる音」の擬音装置があり、すべてのエレベーターには障害者用のボタンや音声表示が備え付けられている。また銭湯内には日用品が一式備え付けられ、浴場の外には化粧台があり、その上には思いつく限りのスキンケア商品が置かれていた。一般のホテルやレストランのトイレのとなりにも女性専用の化粧直しのための部屋があるなど、これらは中国では中々見かけないものである。さらに、日本人は環境保全や資源の循環利用などの面でも努力を続けている。各家庭はごみの分類をしっかりと行っており、科学スタッフは絶えず新たな技術を開発し、ひいては多くの企業において、すでに廃棄物の100%循環再利用を実現している。こうした意識は、いずれも日本の人間本位の度合を証明している。またこうした人間本位といったものは、日本人に深く根ざしている素養の表れである。

大学名： 中央民族大学

氏 名： 申成日

テーマ： 6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

細かな視点から今後ますます中国でニーズが高まる日本の技術を考える時、以下の数点からそれが可能である。

まず初めに、中国と日本はその経済規模において世界の2位と3位である。中国は人口の多さ、日本は技術において名高い。グローバル化が今日まで進んでいる中、アジアに身を置く中日両国の協力は必然的なものである。中国は現段階では発展途上国家であり、日本は先進国家である。現在流行のAI技術、電子技術、超伝導技術、材料技術、ナノテクノロジー、鉄鋼技術などの日本の技術の大部分(多方面)は中国より優れており、中国には多くの労働力がある。また日本の国土は小さく、人口が多く、労働力や土地の価格、原材料費は中国よりはるかに高い。そのため、日本のハイテクノロジーは必然的に中国などの労働力が豊富にある国の協力を必要とする。

現段階では日本企業が中国に進出しているのがほとんどで、中国企業が日本へ進出する状況は少ない。また中国は多くの面で日本の技術や制度に依存している。今回日本での見学を通じて、日本企業の制度が彼ら企業の土台としてどれほど重要なかが分かった。

中国は現在、産業の革新に力を入れているが、たくさんの新技術の開発という道程は長く険しいものであり、外国の核心技術の導入を必要としている。中国は新たな時代、自主革新の時代に向かわねばならない。そのためには絶えず自身のイノベーション能力を高めなければならず、こうした面において日本に学ぶべきだと思う。

中国の今後の発展には私たち若い世代がその中心的役割を發揮し、科学技術の発展を大きく推進し、さらにグローバル化の時代において国際的協力を積極的に模索しなければならない。中国は必ず日本と良いパートナー関係を構築できると信じている。

大学名： 中央民族大学

氏 名： 鄭縁童

テーマ： 2.集団帰属意識の強さ

私たちの今回の活動のメインテーマは即ち「走近日企・感受日本」である。この8日間、私たちは様々な分野の企業を見学したが、最も印象深かったのは日本人の集団帰属意識の強さであった。それは正に評論家の加藤周一氏が言うところの「集団を超える絶対的価値への信仰が成立しがたいだろう。」であり、考え方においては、日本人には強い集団帰属意識があり、人々は常に自分が集団の一員であることを意識し、「自我」は社会的集団として表れる。個人は何かしらの集団に属さなければならず、集団のメンバーは一種の共通の運命や利益によってつながっているのである。

アサヒビール製の工場を例にすると、私たちが工場の生産ラインを見学していた際、工場のスタッフの人数はさほど多くはなかったが、各スタッフは自分の担当段階の生産業務がスムーズに運ぶよう、自分の持ち場で真剣に業務を行っていた。こうした個人的価値の実現は主に集団に従うことにあるという考え方は、日本人が中国人や欧米人と最も異なる部分だと言える。

この他、企業の内部を除き、学校または社会生活の中において比較的個人の争いを避け、集団的行動を重視しているように見受けられた。日本では人々は常に自分を集団の中に置き、欧米人は極力常に自分と他人との違いを見せようとする。日本人は常にあらゆる手段で皆と同じであることを強調し、一人目立つことを嫌がる。そして社会の主流を見極め、自分がその中に溶け込めば必ず成功するという原則を固く信じている。

こうした集団への帰属意識は日本人のあらゆる物事から表れており、直に日本に来てこそ感じるができるものである。日本と中国との違いについては私たちがさらに発掘そして体験していかなければならない。

大学名： 中央民族大学

氏 名： 底家銘

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

私は今回の「走近日企・感受日本」活動における様々な観察や交流を通じて、「日中間の交流」や「マナーの良さと思いやり」という二つの面で印象深いものがあったので、ここではそれについて述べたいと思う。

今回の活動を終え中国に戻り、家族から日本人への印象について聞かれた私は、彼らに対し「日本人はとてもマナーが良く礼儀正しい」と答えた。これは外国人の私が日本人と交流をして感じた最も直接的な印象である。いくつか例を挙げると、道を歩く時は自然と左側を歩き、エレベーターに乗る際は自発的にドアを開くボタンを押し、毎朝道ですれ違う人には面識の有無にかかわらず挨拶をする、などである。これは私が見たほんの一部であり、他にもたくさんの小さな習慣が日本人それぞれに根付いている。これはすでに私たち中国人が考えるところの礼儀と言うよりかは、ある種の風習や習慣に近く、生まれながらにして持っている、変わらないものであり、私は感服せずにはいられなかった。しかも多数の人が少数の人を感化することで好循環を起こし、社会全体に素晴らしい気風が満ちている。

松本楼に到着するまでは、私はそれまで孫中山氏と梅屋庄吉氏との間にこれほど深い友情が存在していたとは思ってもいなかったが、これもまた中日両国の民間友好交流の証しである。京都大学や早稲田大学ではいずれも、中国人学生を積極的に募集しており、これまでの敷居を下げている。また私にも日本で学んでいる多くの中国人学生の知り合いがいる。こうした点も中日間の交流が現在若年化の発展傾向にあることを証明しており、中日両国の民間交流において大きな良い影響をもたらすに違いない。

大学名： 北京工業大学

氏 名： 楊中清

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

日本の空港に到着したその時から、私は日本の至るところで他人を思いやる素晴らしい素養を感じていた。例えば電車やエスカレーターに乗る際は一列に並び、公共の乗り物に乗る際は携帯電話をマナーモードにし、大声で騒いだりはしない。そして道路を横断する際は自動車が歩行者へ道を譲るなど、こうした一つひとつの点はいずれも日本人の他人への思いやりの表れである。またこれらの習慣以外に、ホームステイの際、私は日本人がとても礼儀に気を付けていると感じた。夫婦や親子の間でも、「ありがとう」は常に使う言葉である。誰かが自分を手助けした際、双方がお礼とそれへの返答を述べ、ほぼすべての交流の終わりには、ありがとうの言葉がある。それに対し中国は日本ほど頻繁ではなく、多くの場合、身内が互いに助け合うのは当然だと考えている。この他、日本人のおもてなしといったものも極めて盛大であり、たとえ親しい人であっても、彼らはおもてなしに手を抜くことはなく、相手を大切な客としてもてなす。これが初めて家を訪れる客であれば尚のことであり、彼らは心を込めてもてなし、食事なども豪勢で、客用の食器や座席の位置などは彼ら自身と異なっている。

またさらに感服させられた点としては日本人の客への贈り物の習慣である。こうした贈り物からは彼らの真心や友情

が感じられ、贈り物はその中身より心遣いであることを実践している。

お年寄りへの接し方の面では、若い人皆がお年寄りを敬っている。外では学生が面識のないお年寄りに出くわすと、すすんで会釈や挨拶をするなど、これは中国における光景とは明らかに異なっている。中国人が他人または面識のない人と互いに笑顔を見せることは非常に少ない。

こうしたマナーと生活における細かい点は、いずれも中国の人々が高めていかなければならない点である。感謝を多く伝え、騒ぐことを減らし、他人を思いやり、共に素晴らしい気風を構築していきたいものである。

大学名：北京工業大学

氏名：曾檬

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

初めての訪日ということもあり、私は多くの想像と共に訪れたが、今回の訪日ではたくさんの収穫を得ることができた。夢へと誘う国、幼少の頃から強く憧れていたが、これまで実際に体験することはなかった。そして今回実際に日本を体験してはじめて、自分の想像通りだった部分と、異なっていた部分が分かった。以下私の感想を述べたいと思う。

日本は非常に礼儀を重んじる国であり、お客に対してだけでなく、同僚や部下、友人などにも例外はなく、例え赤の他人に対してもそうである。京都では、私がバスの中から外を見ていたら、車の中にいた女性が笑顔で私に向かって手を振り挨拶をしてくれた。また混み合う道路では皆が互いに道を譲り合っていた。日本に来る前、私はこうした礼儀はわざとらしいと思っていたが、実際に身を以って経験すると、こうした礼儀正しさは決してわざとらしいわけではなく、一種の心の穏やかさによるものだ分かった。平常心だからこそ、また自分を重んじて自分を愛しているからこそ、他人をも尊重し、相手の身分や業種、年齢などを問わず、すべて同様の礼儀を尽くすのである。それはまるで、梢から桜が花開き、清らかな風が谷間をかすめ、温泉が岩の間からゆっくりと流れ出るかのように、自然で穏やかなのである。

こうしたおごり高ぶらない性格の前提は確かな物質的基礎であり、私は中国についても、経済の成長や精神文化への要求の高まりにより、必ず次第に穏やかさや柔軟性を持つようになると信じている。

大学名：北京工業大学

氏名：于鑫淼

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

8日間の訪日活動はすでに終わった。わずかの期間ではあったが、私たちは多くの収穫を得ることができた。

エスカレーターに乗る際、日本の人々は整然と列を作り、また皆左側に立ち、右側は道を急ぐ人のために空けている。公共の場所では日本人はとて静かで、他人を煩わせることはしない。日本は街路や住宅あるいは工場や企業であれ、とても綺麗である。

ホームステイでは居間の向かいの和室に寝泊まりしたが、直美さんや隆康さんは私が良く休めるようにと、私が目覚めるまで居間には入らなかった。朝私が彼らに挨拶すると、彼らもすぐに挨拶を返してくれた。また私が和食に馴染めないのを気にかけて隆康さんは、わざわざ麻婆豆腐を作ってくれた。

渋谷では少し道に迷ってしまい、周囲の人に道を尋ねたところ、彼らは皆とても親切に道を教えてくれ、嫌がったり無視したりする人はいなかった。また私が遅刻したため、車内の人は皆私を待っていて、運転手も車の傍で私を待つ

ていたが、運転手には不満げな表情は見られなかった。

日本の大学生との交流では、私たちは彼らにプレゼントを贈ったが、彼らはそれを受け取ると心からお礼を言い、中身が何であれ、とても嬉しそうであった。

私たちが見学に訪れたそれぞれの場所では、見学を終えその場を離れる際には、企業のスタッフであれ学生であれ、またはホストファミリーのご家族であれ、いずれも私たちに手を振ってお別れをするなど、彼らの誠意に私たちは心を打たれた。

私のホストマザーはとても心が繊細な方であった。歓送会の席上でも常に私を気遣い、私たちが一緒に遊んだ際の写真を現像して私にプレゼントしてくれた。これにはとても感動させられた。これらの写真はこれからも大切にしたいと思う。

学習とはお互いのものである。遥か昔、日本は中国に学んだが、現在日本は非常に発展した国となっており、今後は私たちが日本の良い面を学ばなければならない。

中国は「礼儀の国」の名で知られている。私たちは祖先の礼儀というものを継承していかなければならない。

大学名：北京工業大学

氏名：尚芳

テーマ：1.国民性についての理解

4.日中間の交流

国民性についての理解:私はこれまで国民性というものについて、国民が有すべき権利を享受することだと思っていたが、今回日本での体験を通じて、私は国民性とは互いに相手を思いやるという精神だと考えるようになった。日本は国土面積に限りがあり、特に東京では家屋面積も小さいが、パブリックシアターなど公共の場所の面積は、逆にとても大きい。これは日本の国民が、自身の快適さよりも大衆社会そのものをより気にかけているということを表している。

日中間の交流:日中両国には長い交流の歴史があり、以前は多くの日本人が中国を訪れていたが、現在では多くの中国人が日本を訪れ、日本人は逆に中国へ行く機会は少なくなっている。私は、交流とは必ず双方のものでなければならないと思う。昔に多くの日本人が中国を訪れた際、中国は現在のような発展を遂げておらず、彼らの中国への印象は20~30年前のもので止まっている。そして中国の多くの年配の人々は日本を訪れたことがなく、本当の日本とはどういったものなのかを知らない。そのため私たちがすべきは、双方の交流であり、より多くの日本人に中国へ来てもらい、同時に本当の日本の様子を周囲の人々に紹介することである。